〈解答〉

1　1　オ

2　A　ウ　　B　［例］返した（3字）

3　おおきに（ひらがなのみ可）

4　(1)　A　［例］悪事（2字）　　B　［例］良心（2字）

(2)　［例］役人が自分にお金をひそかに渡そうとしたこと。（22字）

配点　1　4は各2点、他は各1点　10点満点

〈解説〉

「十訓抄」は、鎌倉時代に成立したとされる説話集で、古今和漢の教訓的な説話が約280話収録されている。説話ごとに著者の見解が述べられていることが特徴的である。十訓とは、十カ条の教訓のことであり、約280の説話は、それぞれの教訓ごとに分類されている。

1　傍線部の「の」は格助詞「の」の主格的用法で、「の」を「は（が）」に置きかえることができる。これと同じ意味・用法であるものは、オである。ア～エの「の」はすべて連体修飾格的用法である。

2　趙柔は、道で拾った金の宝物の価値を知っていながらも、それを持ち主へと返した。その話を聞いた人々は、趙柔を大いに尊敬したのである。

3　古文に出てくる語頭・助詞以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、それぞれ「わ・い・う・え・お」に直す。よって、「ほ」を「お」に直し、「おおきに」とする。

4　(1)　楊震は、役人に対して「天も知り、地も知れり。我も知り、人も知る。」と述べている。これは「私とあなたしか知らないだろうと思うことでも、天や地の神々はそれを知っている」という意味である。楊震は「悪事はいくら秘密にしようとしてもばれてしまうものだ」ということを役人に伝えようとしたのである。趙柔や楊震の話からは、他人が見ていなくとも、人は「良心」にしたがって行動するべきだという教訓を得ることができる。

(2)　「天も知り、地も知れり。我も知り、人も知る。」という言葉を通して、楊震は役人に、「あなたの行為は良くない」と伝えようとしたのだと中井さんは考えている。つまり、「あなた」とは役人のことであり、役人の行動とは「楊震にお金をひそかに渡そうとしたこと」である。

〔現代語訳〕

ある本に載っていることには、趙柔という人が、道において、人が残し（ていっ）たところの金の宝物、一束を見つけた。その値は、たくさんの絹に相当するというが、持ち主を呼んで返してやったので、人々はそれを聞いて、大いに趙柔を尊敬した。

またある本に載っていることには、漢の楊震が東萊の長官として、昌邑という所を通ったところ、その地の役人が昔の縁があったので、金をひそかに楊震に渡そうとした。

楊震が言うことには「（このことは、）天も知り、地も知っている。我も知り、人も知る」と言って、最後まで金を受け取らなかった。「四知を恥じる」というのはこれである。おろかな者たちは、人が見ることばかりをはばかって、天がご覧になることを恥ずかしく思わないのである。おろかで情けない心である。